

「虜瘡は麻疹」

三井駿一

「虜瘡」の文字を初出したのは『肘後備急方¹』で、伝存の金の楊用道付広本(一一四四)に就いて今日なお検出が可能である。この病名は現在痘瘡に同定せられ、疑問を挟まれることがない。果たしてそうであろうか。

われわれは既に『諸病源候論』(六一〇年頃)によって痘瘡と麻疹が、それぞれ別個に、すなわち、痘瘡を「豌豆瘡」、「皰瘡」、および「疱瘡」と、また麻疹を「斑瘡」、「発斑」、および「斑毒病」の名で呼ばれていたことを学び知るのである。²

『外台秘要³』がその「天行発斑方」条下で『病源』、『肘後』および張文仲⁴から陶氏を引き、「虜瘡」を含む麻疹に関する一連の記事を掲載することは「虜瘡」が痘瘡であることを完全に否定する。なぜなら、『外台』が『病源』に従って麻疹と痘瘡を峻別して別個の条目を立て、虜瘡を麻疹条

下に所属せしめていることを無視できないからである。

「世人云フ。建武中ヲ以テ南陽ニ於テ虜ヲ撃ツテ得ル所」はこの名の由来であるが、これは南齋明部の西暦四九四年から四九八年に至る間の公算が大きい。⁵

宋太祖勅撰の『聖恵方』(九九二)には傷寒、時氣、熱病の病因別病類区分に従って、発斑瘡、発斑、斑瘡および豌豆瘡、発豌豆瘡、発疱瘡を区別するが、小児の条下では発疹痘瘡の名で麻疹と痘瘡を総称する。⁶『外台』が引用する諸家の麻疹処方では本書になお採用を見るのは『肘後』の塗布剤と特別食療法、『小品方』の葛根橘皮湯、『隨身備急方』の黒奴丸、『古今録驗方』の漏蘆橘皮湯で、これらの内服処方では痘瘡と共通しない。

唯一の疑問は『肘後』の「比歳、病有リテ時ニ行ハル。スナハチ瘡ヲ頭面ニ発シテ身ニ及ブ。須臾ニシテ周匝ス。状、火瘡ノ如シ。皆白漿ヲ戴キ、随ヒテ決シ随ヒテ生ジ即治セズ。劇ナル者ハ多ク死ス。治シテ差(瘡)ユルコトヲ得ルノ後、瘡瘢紫黒ナリ。弥歳ニシテ方(始)メテ滅ス。」⁷に見える皮疹先端の水疱形成と、その経過過程である。しかし瘢痕が一年後に消退し去ることは痘痕の終生的なものと

著しく異なる。もし古代の麻疹が致命率の高い重篤疾患であり、その皮疹も二度火傷3のような外観を呈したと解するならば、この症状こそ当時の麻疹発疹の特性を表現するものと言えよう。流行頻度を重ねるにつれ、病態推移 Pathomorphose を発現することは容易に首肯できる。

注

- 1 東晋の葛洪（二八三—三六三—余嘉錫による）の原著で、梁の陶弘景（四五六一—五三六）によって増補せられた。増補部分は朱墨の分ち書きで区別せられていたと伝えられるが、後世無視せられ判別は全く不可能となった。この引用は卷二、治傷寒時氣温病方第十三中にある。この篇の記述には錯簡が多いと考えられる。
- 2 拙著「麻疹の歴史」（奥野良臣、高橋理明『麻疹・風疹』所収 昭四四 頁六 表1
- 3 唐の王燾の撰、天宝十一年（七五二）に成る。本書は燾が中央官庁にあった時、宏文館の医書に就いて摘録したものを、後地方官に配転せられて編集したため、台閣を外にして成るの意から書名に冠したものと恐れ
- 4 『外台』が殊更に張文仲（？—七〇〇、恐らく『隨身備急方』から陶氏を引くのは、『大観本草』（一一〇八）升麻の項で、ほぼ同一文を『外台』から引用するのと併せ、奇奇の感がある。張文仲は則天武后の尚藥奉御であった。
- 5 拙著 前掲書 頁一九 注6および7
- 6 痘麻混乱の兆しは既にこの頃から始まると考えられる（拙著 日本医事新報 二二四六号 昭四〇、前掲書 頁二二 注24）。
- 7 『外台』、『大観本草』、それぞれに字句の異同がある。その主なものを挙げると、両書共に有病の下を「天行発斑瘡」とし、また後者では「火瘡」を「火燒瘡」とする。これらの病症については『病源』卷三十五、『医心方』卷十八に解説がある。
- 8 『日本書紀』卷二十、敏達天皇の条下の疫病の記事に「瘡ヲ発シテ云々」および「身焼カレ打タレ摧カルル

ガ如クニシテ云々」の表現がある。『病源』には同様の表現を痘麻共に用いているので、これだけに基づいて当時の疫病を痘瘡か麻疹の何れかに同定することはできない。

(帝塚山学院大学)

丸山敏秋

嵇康『養生論』の一考察

自己の生を安らかに保って天寿を全うすることは、人間の根源的な欲望と言えよう。疾病を除かんとする医の行為も、この欲望に根ざしたものに他ならない。その中に、疾病を未然に防いで健全な心身を保つための養生の分野があり、予防医学として大きな役割を荷っている。

周知の通り、中国伝統医学においては早くから努めて養生が説かれている。その特質を明らかにするに先立ち、現在筆者は古代以来のいくつかの養生思想の特色を見出し、系譜づける作業を進めているが、その流れの中に嵇康という人物がいる。彼は医家ではない。しかしその著作『養生論』は医書にもしばしば引用され、中国医学思想史における養生の考え方に少なからぬ影響を及ぼしたと思われる。今回は彼の養生論の特色を明らかにし、古代以来の養生思想の流れの中で、それがどのように位置づけられるかを考